

タン自動吸引 中企庁奨励賞

宇佐市の会社 介護者の負担軽減

宇佐市の福祉医療器具メーカー、徳永装器研究所開発の「気管内タン」の自動低量持続吸引システム」が11年度九州地方発明表彰の中小企業庁長官奨励賞に選ばれた。難病の在宅医療に携わる大分協和病院（大分市）の山本真院長（57）ら医師団の協力で、約11年かけ販売にこぎつけた。

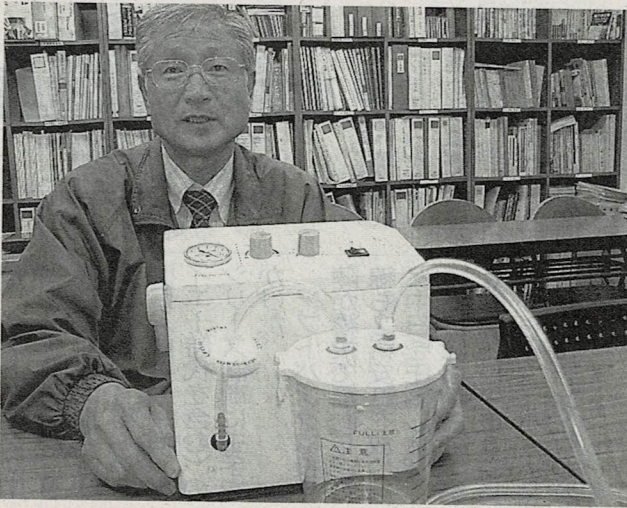
筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの難病患者は自力でタンを出せず、1〜3時間ごとの吸引が必要。介護家族の負担は計り知れない。患者の苦痛を和らげ、介護者の負担も軽減する一石二鳥の画期的発明となった。

医師の立ち会いで、

気道を確保する人工呼吸器のチューブに「気管カニューレ」を装着し、箱形の吸引器（重さ約6キ）を使い吸引する。「連続的に、ゆっくり、静かに吸引できる」と好評という。

10年度、220台の販売実績があり、今後毎年200台以上の販売を目指す。徳永修一社長は「今後もみんなが幸せになる機械を開発したい」。山本院長も「誤作動を減らすなど、まだ改良の余地がある」と話す。

タン吸引システムを開発した徳永社長



徳永社長は大手電機メーカーを辞め、宇佐市に戻り、95年に福祉機器開発を始めた。認知症患者が踏むと知らせるセンサーマットも開発した。同研究所0978・33・5595。

【大瀧美知朗】